

第343回

日本泌尿器科学会新潟地方会

《プログラム》

日 時：平成19年9月8日（土）午後4時
会 場：新潟グランドホテル 5階 『波光の間』
新潟市中央区上大川前通3ノ町 025-228-6111

次回 第344回新潟地方会予告

日時：平成19年12月15日（土）午後3時
会場：未定
演題申込期限：平成19年11月21日（水）

※ すべてPCのみの発表とさせていただきます。

※ 口演時間は、7分。討論2分

951-8510 新潟市中央区旭町通1の757

新潟大学医学部泌尿器科学教室内

日本泌尿器科学会新潟地方会

TEL：025（227）2289／FAX：025（227）0784

会長 高橋公太

1. 献腎移植時に尿管ステントを使用し腎孟外に自然逸脱した2例

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野

石崎文雄、信下智広、安楽 力、中川由紀、
齋藤和英、谷川俊貴、西山 勉、高橋公太

同ドナーから施行した献腎移植2例で術中に使用した尿管ステントの腎孟外自然逸脱を経験したので報告する。

症例は65歳と52歳。術後にドレーンより尿の流出を認めた。画像所見より尿管ステントが腎孟外に逸脱していたが、両者ともドレナージなどの保存的治療で軽快した。

2. 結石を合併した尿管瘤の女児の1例

厚生連刈羽郡総合病院泌尿器科 武田啓介、羽入修吾

症例は1歳5月女児。2007/6/8下着に血性分泌物が付着し当院小児科を初診。6/11当科紹介初診。エコーで右尿管瘤（単一尿管、膀胱内型、径1.5cm）と尿管瘤内結石4mmを認めた。CTと尿路造影でも同様の所見であった。7/4全身麻酔下に小児用TURセットを用いて①尿管瘤切開術（遠位端を約5mm横切開）②尿管結石破碎除去術を施行した。8/6エコーで尿管瘤は5mmに縮小していた。血尿もなく経過良好である。

3. 尿管原発平滑筋肉腫の一例

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野¹⁾、同 分子細胞病理学分野⁴⁾済生会新潟第二病院²⁾、県立がんセンター新潟病院³⁾

若生康一¹⁾、原 昇¹⁾、新井 啓¹⁾、小松集一¹⁾、武田啓介¹⁾、谷川俊貴¹⁾、
西山 勉¹⁾、高橋公太¹⁾、吉水 敦²⁾、車田茂徳²⁾、若月俊二³⁾、山本 尚⁴⁾
川崎 隆⁴⁾、梅津 哉⁴⁾

症例は68歳男性。左側腹部痛の精査目的に新潟大学医学総合病院へ紹介された。腹部骨盤CTでは左水腎症及び左尿管に腫瘍を認めた。尿管鏡検査では高度な浮腫状粘膜のみで明らかな腫瘍は認めなかった。その際の分腎尿細胞診はクラスIであったが尿管腫瘍を否定しきれないため後腹膜鏡補助下左腎尿管全摘術を施行した。病理組織診断は平滑筋肉腫であった。病理組織所見によってのみ確定診断が可能な尿管原発平滑筋肉腫の一例を経験したので報告する。

4. 多重ロジスティック回帰分析によるESWL治療成績の検討

新潟こばり病院 木村元彦 笹川 亨

過去3年間にESWL治療を行った601結石を対象とし、治療3ヶ月後の「完全排石」をend pointとして多重ロジスティック解析を行った。部位・長径・水腎・年齢・症状が独立予後因子になることが示された。各変数の回帰係数は、部位（中下部尿管を対照）：腎は-1.16、上部尿管は-0.65、長径（mm）：-0.073、年齢（年）：-0.021、症状（疼痛なしを対照）：疼痛ありは0.61、水腎（軽度以下を対照）：中程度以上は-0.66であった。つまり中下部尿管、長径小、若年、疼痛あり、水腎軽度以下、の症例で完全排石する可能性が高かった。

5. Male LUTS 患者での夜間頻尿の検討

厚生連刈羽郡総合病院泌尿器科 羽入修吾、武田啓介

過去4年間に当科を受診した前立腺 $>20\text{ml}$ で、尿流測定、残尿、排尿日誌などの記録が得られた50歳以上の男性36例で夜間頻尿について解析した。夜間尿量、夜間多尿指数NPI、夜間過剰回数、年齢は夜間回数と相関があった。最大1回量と夜間回数には負の相関があった。前立腺体積、最大尿流率、残尿量は夜間回数と相関がなかった。

6. 腎尿管全摘術における経尿道的尿管引抜き術（ビデオ）

県立がんセンター新潟病院 北村康男、若月俊二、斎藤俊弘、
小松原秀一、原 昇

経尿道的尿管引き抜き術は1986年以降採用し、下部尿管に画像診断上腫瘍を認めない腎盂癌・上部尿管癌を対象とした。術式は腎摘出後に尿管断端よりカテーテル（カテ）を膀胱まで挿入、ここで経尿道的に内尿管口を全周性に内視鏡にて電気凝固した後に、カテを膀胱から外尿道口へ引き出し、開腹術野の中で尿管断端をカテに結紮固定した後にカテを外へ引き抜くと、外尿道口より内翻された尿管がカテと一緒に抜け出る方法である。この術式のコツをビデオにて供覧することを目的とした。

【セミナー 15分】

7. 末期腎不全患者における腎細胞癌

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野 笠原 隆

末期腎不全患者においては、悪性腫瘍の発生頻度が高まり、特に腎癌では健常人に比し数十倍のリスクがあるということはよく知られている。末期腎不全にて透析療法を受ける患者数は年々増加しており、さらに透析期間の長期化が社会的な問題となっている。加えて、スクリーニング画像検査の普及に伴って、最近では症状のない腎癌が発見され、日常診療でも取り扱う機会が増えている。末期腎不全患者における腎癌について、組織学的特徴を中心に、当院で治療を行った症例を交えて報告する。

[休憩 17:09～17:25]

サテライトセミナー

日 時：平成19年9月8日（土）

17時25分～18時40分

会 場：新潟グランドホテル 5階『波光の間』

17：25～17：40

製品紹介 「前立腺癌内分泌療法中のホットフラッシュの対処法」

あすか製薬(株) 学術マネジャー 岩井邦夫

17：40～18：40

座長 新潟大学大学院 腎泌尿器病態学分野
教授 高橋 公太 先生

「新膀胱造設術」-手技と長期成績-

講師 和歌山県立医科大学泌尿器科学教室
教授 原 勲 先生

共催 日本泌尿器科学会新潟地方会
あすか製薬株式会社

サテライトセミナー終了後、3階「悠久の間」にて懇親会となります。